

日本中國學會報 第七十三集  
二〇二二年十月九日 發行 拔刷

陶淵明「飲酒二十首」小論——連作詩としての可能性——

加藤 敏

## 陶淵明「飲酒二十首」小論——連作詩としての可能性——

加藤 敏

### はじめに

陶淵明には一編に三首以上の作品を含む連作詩が八編ある。その中には「形影神」のように、連作を構成する各作品が詩的表出として構造化され、それぞれ緊密な関係をもつて展開し、表現者の意圖、思索と敘情の形を明らかに窺うことのできるものがある。一方で「飲酒二十首」「擬古九首」「詠貧士七首」等のように、各作品間の関係、全體構造が必ずしも明確ではない連作詩がある。しかしこれらのうち、例えば「詠貧士七首」は、作品相互の緊密な関係と全體の構造とを有する連作詩として讀むことができる。

「詠貧士七首」は、其一において貧士の飢寒と孤獨を受け入れる決意を示し、其二では貧士としての日々の中で生じた心の揺らぎを語り、其三以下において語り手の疑問に應じて登場する貧士たちによって、道義、貧賤と飢寒、孤獨の問題が解決され、其七で固窮の節が確認されている。各作品が緊密に關係しながら展開し、構造化されたものとして解釋できるのである。思索がイメージを生起し、そのイメージが思索を促し、また新たなイメージが喚起されるという思索と敘情のあ

り方が、連作としての表現を可能にしている。

こうした作品間の緊密な關係の存在と全體の構造の可能性とを、陶淵明の代表作である連作詩「飲酒二十首」に窺うことはできるのであろうか。その序は次のように言う。

余閑居寡歡、兼比夜已長。偶有名酒、無夕不飲。顧影獨盡、忽焉復醉。既醉之後、輒題數句自娛。紙墨遂多、辭無詮次。聊命故人書之、以爲歡笑爾。

余閑居して歡び寡なく、兼ねて比夜已に長し。偶名酒有れば、夕べとして飲まざるは無し。影を顧みて獨り盡くし、忽焉として復た醉ふ。既に醉ふの後、輒ち數句を題して自ら娛しむ。紙墨遂に多く、辭に詮次無し。聊か故人に命じて之を書せしめ、以て歡笑と爲すのみ。

序では「辭無詮次」と、辭句に前後の順序の無いことが明言されている。この言葉は作品の配列も含んでいると考えられる。しかしながら、すでに明、黃文煥は『陶詩析義』において「詮次之工、莫工於此。而題序乃曰辭無詮次、蓋藏詮次於若無詮次之中、使人茫然難尋。（詮次の工みなること、此よりも工みなるは莫し。而して序に題して乃ち辭に詮

次無しと曰ふは、蓋し詮次を詮次無きが若きの中に藏して、人をして茫然として尋ね難からしむ。」と、隠された「詮次」があるとする解釋を提示している。先行研究においても、内容のまとまりからいくつかに分段して構成を捉える試みがあり、また下定雅弘氏、稀代麻也子氏のように、作品相互の關係性にも着目しつつ、作品の構造、テーマを究明した論考が著されている。「飲酒二十首」を連作として解釋するうえで、「詮次」の有無ということが問題となるのである。

本小論も、作品間の關係と全體構造の存在を措定している。ただ、その關係や全體の構造は、豫め意圖されていたものでも、「詮次」の結果によるものでもない。それは、閑居の日々において、「詮次」を意識することなく、心の趨くままになされた、道義、歸田、隱遁、飢寒、孤獨にかかわる思索と絃情の營みの中に認めることができるものであると考える。

陶淵明の表現について、大上正美氏は、表現が對自的に行われているとして「そのような對自性の顯著な様相は、かくあつたそれまでの自分を振り返り、かくある現地點の自分の心と感情にどこまでも拘る、その上で、その執拗な拘りの中からせり出してくるかくあるべき自己を言葉にしようとするものであつた。」と述べている。

作品間の關係、全體の構造を先のように措定すると、そこには「對自性の顯著な様相」がどのように表現されているのであろうか。

本小論は、作品間の關係と表現の對自性とに着目しながら、「飲酒二十首」が、田園に止まり続ける自らのあり方を改めて捉えなおした作品であると讀み解くことを試みたものである。

## 一、歸田

### 其一

衰榮無定在、彼此更共之。邵生瓜田中、寧似東陵時。寒暑有代謝、人道每如茲。達人解其會、逝將不復疑。忽與一觴酒、日夕歡相持。

衰榮に定在無く、彼此更之を共にす。邵生瓜田の中、寧ぞ東陵の時に似ん。寒暑に代謝有り、人道毎に茲くの如し。達人其の會を解し、逝、將に復た疑はざらんとす。忽ち一觴の酒と、日夕歡びて相持す。

其一は、まず榮枯盛衰は人の世の常であるとして、秦の東陵侯から庶民になるといふ盛衰を経験した邵平を想起する。續いて「寒暑代謝」と人道とは同じであるとする認識を示す。この「寒暑代謝」を袁行霽氏は「寒暑代謝即所謂天道。(寒暑の代謝はつまりいわゆる天道である。語り手は、天道と人道の一致ということからすれば、自分の閑居は必至のことであるとして、飲酒を樂しむ現在の自分の姿を見つめている。そして、この對象化された自分の姿は、己の内なる他者にも示されている。

### 其二

積善云有報、夷叔在西山。善惡苟不應、何事空立言。九十行帶索、飢寒況當年。不賴固窮節、百世當誰傳。

善を積めば報ひ有りと云ふも、夷叔は西山に在り。善惡苟くも應ぜずんば、何事ぞ空しく言を立つる。九十にして行、索を帶ぶ、飢寒況んや當年をや。固窮の節に頼らずんば、百世當に誰か傳ふべけんや。

其二の語り手は、天道と人道は一致しているのではなく、乖離しているのであって、善悪がそれぞれ相應に報われることのないのが人の世であるとする。そして、善（道義）を貫き、首陽山に餓死した伯夷叔齊を想起し、天道は人道に與しないことに慷慨する。

しかし、「感士不遇賦」に「原百行之攸貴、莫爲善之可娛（百行の貴ぶ攸を原ぬるに、善を爲すの娛しむべき莫し）」とあるように、善行が必ずしも報われないものであったとしても、士は善を爲すことを喜びとするものであるとして、九十歳にしてなお繩を帶としていた貧士榮啓期を想起する。

「飢寒況當年」は、彼の飢寒を言う句であるが、この句は「彼の飢えと寒さは、まして少壯の頃にはなおさらだったであろう」と讀みたい。其十九では「疇昔苦長飢、投耒去學仕（疇昔長飢に苦しみ、耒を投じて去りて仕を學ぶ）」と、自らが若い頃、飢えに堪えられなかつたことを述懐している。壯年において世に出ることなく、飢えや寒さに苦しむ時の、その飢寒の感覺は、老年に比してはるかに熾烈なものであつたらうと、榮啓期のことを思いやるのである。榮啓期に自らの飢寒を見ることによつて、「貧は士の常なり」として道義を貫いて生きた彼の姿がリアリティを伴つて立ち上がる。そしてそのイメージが、「固窮の節によるのでなければ、百世も名が傳わることはないのだ」という思索を可能にしている。

本詩の語り手は、善行が必ずしも報われない人の世にあつて、自らがいかにあるべきかを思索する者である。その對自的な表現は、其一の語り手、そして己のうちの他者にも向けられている。

### 其三

道喪向千載、人人惜其情。有酒不肯飲、但願世間名。所以貴我身、豈

不在一生。一生復能幾、倏如流電驚。鼎鼎百年内、持此欲何成。

道喪はれて千載に向みなんとし、人人其の情を惜しむ。酒有るも肯へて飲まず、但だ世間の名を顧みる。我が身を貴ぶ所以は、豈に一生に在らざらんや。一生復た能く幾ぞ、倏として流電の驚かすが如し。鼎鼎たる百年の内、此を持して何をか成さんと欲する。

其三の語り手は、榮啓期を固窮の節を懷く貧士たらしめた人の世に目を向ける。「百世」という時間は、「道喪向千載」、すなわち太古の純朴な道が失われた千年という時間の経過として捉えなおされている。表出の方向は、其一、其二と異なり、直接には世俗、すなわち政治世界の人々に向けられている。

「人人惜其情」「有酒不肯飲」の句は、上古にあつては、人は皆それぞれの分に従い、自在に振る舞い、己が心情を満足させていたが、今の人々は自らの心情にかなうようにすることを惜しみ、一樽の酒があれば、それを存分に飲んで酔い、心を満足させればよいものを、そうしようとはしないことを言う。「感士不遇賦」には「或擊壤以自歡、或大濟於蒼生。靡潛躍之非分、常傲然以稱情（或は擊壤して以て自ら歡び、或は大いに蒼生を濟ふ。潛躍の分に非ざる靡く、常に傲然として以て情に稱ふ）」とある。世人の心には名譽、名聲への欲求があるが、道が失われた時代、短い人生において、それに何の意味があるのかと、語り手は世俗の價値觀を厳しく否定する。この言葉は、大上氏が指摘するように、「自己の中の他者」「複雑な内面を抱え持っている自己の内面」にも向けられている。

### 其四

栖栖失群鳥、日暮猶獨飛。裴回無定止、夜夜聲轉悲。厲響思清遠、去來何依依。因值孤生松、斂翮遙來歸。勁風無榮木、此蔭獨不衰。託身

已得所、千載不相違。

栖栖たり群を失へる鳥、日暮猶ほ獨り飛ぶ。裴回して定止すること無く、夜夜聲轉た悲し。響きを厲しくして清遠を思へども、去來すること何ぞ依依たる。孤生の松に値ふに因り、翻を斂めんとして遙かに來歸す。勁風に榮木無きも、此の蔭獨り衰へず。身を託し己に所を得れば、千載相違はざれ。

本詩の語り手は、其三の語り手のように迷わずに世俗を否定し去ることができない。世俗の否定の主張が、却て政治世界と自分の心的隔たりを認識させ、官界において他者でしかない自分の姿が立ち上がったのである。表現が世俗ではなく、自らのありかたを志向するのは、其二の語り手と共通する。

彼は、自らを、群をはぐれた一羽の鳥、失群の鳥の形象に託す。この鳥は、自分の意思によつて群を離れたのではなく、群の中に自分の居場所を失つたのであり、時には遠い清浄な世界に憧れるものの、飛び去ることはなく、落ち着くべきところを求めてあてどなく飛び回り、最後に「孤松」を見いだしている。

言葉を紡いで失群の鳥の形象を描き出すことをおして、自らの有り様が把握されていく。自分が疎外によつて他者となつたこと、あるべき姿を求めて苦惱したこと、世情を遠く離れた清浄な世界を求めようとしたことを想起し、最後に安息の地として見いだしたのが田園であつたことを確認し、二度とここを離れまいと決意する。

その決意は、現實の日々における實感を得て確かなものとなる。従つて其五では具體的な田園のイメージが語られることになる。思索がリアリティーを求めるのである。

### 其五

結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然見南山。山氣日夕嘉、飛鳥相與還。此中有真意、欲辨已忘言。

廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し。君に問ふ何ぞ能く爾ると、心遠ければ地自ら偏なり。菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る。山氣日夕に嘉く、飛鳥相與に還る。此の中に真意有り、辨ぜんと欲して已に言を忘る。

其四の語り手の思索は続く。まず、歸來した地が人境であつたことが示される。しかしそこは人境であるにもかかわらず、車馬の訪れがない。その理由を問う思索の中で、語り手は、世俗との空間的な距離は近くても、自らの心が遠く隔たり、ほとんど意識に上らない状態にあることを認識する。世俗を思うこともなく、延命の菊を摘み、南山を眺める。眼前に展開されているのは、よき南山のたたずまいと、ねぐらに歸る鳥の姿であり、日常的な夕暮れの情景であるが、この空間は著しく美化されて紡ぎ出されている。こうした美化された情景の描写は、例えば「歸園田居五首」等にも見られる。自らのあり方、あるべき空間を認めようとする営みによつて、日常の田園はこうした美的空間に形象されてゆくのである。

この美化された日常の情景が、今ここにかくある自分こそ自らにとつての本来のあり方なのだという實感、充足感をもたらす。歸田して今ある自分が、實感をもつて肯定されているのである。ただ、ここでは自らを隱遁者として明確に意識しているわけではない。

### 其六

行止千萬端、誰知非與是。是非苟相形、雷同共譽毀。三季多此事、達士似不爾。咄咄俗中惡、且當從黃綺。



行止千萬端、誰か非と是とを知らんや。是非苟くも相形あらはるれば、雷同して共に譽毀す。三季より此の事多し、達士は爾らざるに似る。咄咄たり俗中の惡、且く當に黃綺に従ふべし。

「飲酒二十首」については「感士不遇賦」との關連が指摘されている。本詩においても、第六句までの表現は、「或擊壤以自歡、或大濟於蒼生。靡潛躍之非分、常傲然以稱情。世流浪而遂徂、物群分以相形。密網裁而魚駭、宏羅制而鳥驚。彼達人之善覺、乃逃祿而歸耕。（或は擊壤して以て自ら歡び、或は大いに蒼生を濟ふ。潛躍の分に非ざる靡く、常に傲然として以て情に稱ふ。世流浪して遂に徂ぎ、物群分して以て相形る。密網裁たれて魚駭き、宏羅制せられて鳥驚く。彼の達人の善く覺り、乃ち祿を逃れて歸耕す。）」とも重なる。太古の世、人は分に應じて傲然と性情になかう生き方をしていた。その生き方は様々であり、一切の是非の別などなかったが、やがて人は群れとして別れ、上下の區別が生じ、嚴しい法網が張られるようになった。達人はそれを悟り、歸耕したと云うのである。

本詩の表現の視座は、其三と重なる。其四、其五における思索に對して、本詩においても世俗のあり方を強く否定し、商山の四皓のごとき隱遁が志向されているのである。

## 其七

秋菊有佳色、裊露掇其英。汎此忘憂物、遠我遺世情。一觴雖獨進、盃盡壺自傾。日入群動息、歸鳥趣林鳴。嘯傲東軒下、聊復得此生。

秋菊に佳色有り、露に裊うらふ其の英を掇とる。此の忘憂の物に汎かへ、我が世を遺るる情を遠くす。一觴獨り進むと雖も、盃盡き壺自ら傾く。日入りて群動息み、歸鳥林に趣きて鳴く。嘯傲す東軒の下、聊か復た此の生を得たり。

其六に展開された隱遁者たらんとする思索は、そのよりどころとなるリアリティーを求めぬ。本詩においては、具體的な隱逸の狀況が語られ、語り手は忘憂の酒を酌みつつ、世俗を忘れ去つた自らを確認してゆく。

吉川幸次郎氏<sup>⑤</sup>は、「淵明の姿には、やはり何か沈痛なものが感ぜられる。酒に名づけて『憂いを忘るる物』というのは、たちきりがたい憂いがあるからではないか。」と云う。その憂いは、其三、其六における世俗の否定の根柢にある、道義の失われた時代に對する憂い、そしてその時代に生きなければならぬ自らの存在に對する憂いであつたろう。語り手は、飲酒によつてそれを忘却するのである。

秋菊を浮かべた酒を飲めば、「遺世情」を「遠」くするといふ。斯波六郎氏<sup>⑩</sup>は「我が遺世の情を遠せり」と讀む。連作詩として見れば、其五における「心遠」の狀態がさらに遠いものとなることを言うことと解釋することができる。世俗に纏わる憂いを忘れきつたとしてうそぶき、これが私という存在の在り方なのだ、隱遁者としての充足感、満足感が截然とした語氣をもつて表出されている。其七は、其五の語り手に對して提示された作品として讀むことができる。

では、本詩の語り手の志向する隱遁はどのようなものであるのか。思索は續く。

## 二、隱遁

### 其八

青松在東園、衆草沒其姿。凝霜殄異類、卓然見高枝。連林人不覺、獨樹衆乃奇。提壺挂寒柯、遠望時復爲。吾生夢幻間、何事繼塵躡。  
青松東園に在り、衆草其の姿を沒す。凝霜異類を殄つくし、卓然とし

て高枝を見る。林に連なれば人覺らず、獨樹なれば衆乃ち奇とす。壺を提げて寒柯に掛け、遠望時に復た爲す。吾が生夢幻の間、何事ぞ塵囂に緝とらがれんや。

本詩においては、隱遁者としての自らを孤高の松に託しつつ思索が展開する。釜谷武志氏は、陶淵明が「自ら憧憬するところの松と心理的に一體化していると考えられる」と指摘する。語り手は、夢幻の間の人生なのだから、世俗に拘わることなどはせず、孤高の存在としてあり續けるのだと、自らに語りかけている。

苦惱多き人生を夢幻の間とは言い切れず、世俗との關係を「緝塵囂」とは捉えられないであろう、其二、其四、其五の語り手に對して、この語り手は、人生は夢幻の間、世俗に繋がれることはないと言いつつ、ただ彼は、自ら孤高を保つことに全く迷いが無いわけではない。世界を遠望し、夢幻の人生を思う姿は、決して自己のありかたに満足している者のそれではない。自らの生きる暗澹たる世界と短き人生とに思いを致した時、これでよいのだと決斷するのである。

## 其九

清晨聞叩門、倒裳往自開。問子爲誰與、田父有好懷。壺漿遠見候、疑我與時乖。縑纒茅簷下、未足爲高栖。一世皆尙同、願君汨其泥。深感受老言、稟氣寡所諧。紆轡誠可學、違己詎非迷。且共歡此飲、吾駕不可回。

清晨門を叩くを聞き、裳を倒にして往きて自ら開く。問ふ子は誰と爲すかと、田父に好懷有り。壺漿もて遠く候せられ、我の時と乖くを疑ふ。縑纒茅簷の下、未だ高栖と爲すに足らず。一世皆同じぎを尙ぶ、願はくは君其の泥を汨なさんことをと。深く父老の言に感ずるも、稟氣諧ふ所寡し。轡ななを紆ななぐるは誠に學ぶべきも、己に違ふは

詎ぞ迷ひに非ざらんや。且く共に此の飲を歡ばん、吾が駕は回らすべからず。

其八の孤高の隱遁についての思索は、さらに一つの思索を喚起する。それは田父の言葉として語られる。田父は、語り手のあり方を「高栖」ではないとし、泥を濁す生き方をすべきではないのか、と言う。田父の勧めるのは、世俗に身を置きながら、その流れにまかせていく、道を會得した者の生き方である。語り手は、田父の意に感謝しつつ、自らの性格は世俗に合わせる事が難しいと、その勧めを拒絶する。さらに、生き方を變えることは學ぶべきだが、自らの性格に背くことになれば、それは迷いなのであり、殊に「吾駕不可回」、世俗に戻ることはできないと言明する。

## 其十

在昔曾遠遊、直至東海隅。道路迴且長、風波阻中塗。此行誰使然、似爲飢所驅。傾身營一飽、少許便有餘。恐此非名計、息駕歸閑居。

在昔曾て遠遊し、直ちに東海の隅に至る。道路廻かにして且つ長く、風波中塗に阻む。此の行誰か然らしむる、飢ゑの驅る所と爲るに似たり。身を傾けて一飽を營まば、少許にして便ち餘り有らん。此れ名計に非ざるを恐れ、駕を息めて閑居に歸る。

本詩の語り手は、其六く其九の語り手とは異なる。語り手はまず其九で言明されていた「寡所諧」、自分の性情が世俗と合わないということにこだわり、嘗て東海の邊りまで出かけ、途中で風波に妨げられたことを回想する。「風波」の語は、「歸去來兮辭」序にも「于時風波未靜、心憚遠役。(時に風波未だ靜かならず、心遠役を憚る。)」とあるように、騷亂、不安定な社會狀況を喩える語として用いられている。「風波阻中塗」の句は、飢えに驅られたかのごとく泥を濁す生き方を

しようとしたが、世情に翻弄され、苦々しい思いをしたことを婉曲に述懐していると讀める。

翻弄された語り手は、「傾身營一飽、少許便有餘」、飢えということであれば、全身を傾けて努力すれば、ゆとりもできるであろう、と判断し、世俗に合わせることでできない自分が世俗に在り続けることは恐らく賢明な考え（名計）ではないとして歸隱したと言ふ。では自らにとつての「名計」とは何であつたのか。

### 其十一

顔生稱爲仁、榮公言有道。屢空不獲年、長飢至于老。雖留身後名、一生亦枯槁。死去何所知、稱心固爲好。客養千金軀、臨化消其寶。裸葬何必惡、人當解其表。

顔生は仁を爲すと稱せられ、榮公は道有りと言はる。屢空しくして年を獲ず、長く飢えて老に至る。身後の名を留むと雖も、一生亦た枯槁す。死し去りて何の知る所ぞ、心に稱ふを固より好しと爲す。千金の軀を客養するも、化に臨みて其の寶を消す。裸葬何ぞ必ずしも悪しからん、人當に其の表を解すべし。

本詩は、「名計」、則ち「稱心」、心にかなうことの大切さを言う。冒頭の六句で顔淵と榮啓期が一生枯槁していたことを指摘した後、やや唐突に「心に稱ふを固より好しと爲す」とあるので、顔淵と榮啓期は夙れた生涯を送つただけであつたと、否定的に讀まれることが多い。この六句の表現の形は、其二の第五く八句と同一だと考えられる。其二の語り手は、飢寒に苦しめられ、貧士としての生涯を送つた榮啓期に固窮の節を見ていた。本詩も顔淵と榮啓期のうちに「稱心」の生涯を見ていと解釋することができるであろう。

顔淵は、『論語』雍也に「子曰、賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在

陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。（子曰はく、賢なるかな、回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人其の憂ひに堪へず。回や其の樂しみを改めず。）」とあるように、貧窮の中にあつても自らの樂しみを改めることがなかつた。また、『列子』天瑞には、孔子の問いかげに、榮啓期が「吾樂甚多。（吾が樂しみ甚だ多し）」と答えた話を載せている。貧士の常であるとして、心にかなう日々を過ごし、憂い無く生きた人物であつたのである。

第一く八句は、顔淵と榮啓期は心にかなう生き方をしていたとして、例えば、「顔淵は仁道を行つたと稱され、榮啓期は有道であつたと言ふが、顔淵は天逝し、榮啓期は飢えたまま老いた。死後の名聲を得たものの、一生夙れきつていた。しかしそれは他者の評價なのであつて、彼らにとつて世人の稱贊は何ほどのものでもなく、一生夙れきつてはいたが、心にかなうた生涯だつたのである。死んでしまえば何もわからないのであるから、彼らのように心にかなうた生き方をすることこそが大切なのだ。」のように讀むことができる。

語り手は、道義を守ることを心にかなうこととして生きた二人の姿を想起し、「稱心固爲好」と實感をもつて語る。彼らのように、貧窮を自らの中に引き受け、自分は固より窮する者であるとし、道義を守ることを心にかなうこととして樂しみつつ生きられれば、それでよいのであつて、死後の裸葬も結構だと、高揚した心情を表出するのである。ここには、世俗における日々を回顧し、自らのあり方を確認しつつ、ふさわしい生き方を求めて思索を進めてきた者の姿をうかがうことができる。

晩年の「自祭文」に「自余爲人、逢運之貧。單瓢屢罄、絺綌冬陳、含歡谷汲、行歌負薪（余人と爲りてより、運の貧しきに逢ふ。單瓢屢罄き、



締給冬に陳ぬるも、歡びを含みて谷に汲み、行歌して薪を負ふ。」とある。飢寒に苦しみ、道義を守りつつ過ごした日々こそ心になつたものであり、喜びつつ水を汲み、薪を背負つて過ごしたと言うのである。この姿は、本詩に言う「稱心」の表象である。

## 其十一

長公會一仕、壯節忽失時。杜門不復出、終身與世辭。仲理歸大澤、高風始在茲。一往便當已、何爲復狐疑。去去當奚道、世俗久相欺。擺落悠悠談、請從余所之。

長公會て一たび仕へしも、壯節忽ち時を失ふ。門を杜<sup>と</sup>ぎして復た出でず、終身世と辭す。仲理大澤に歸り、高風始めて茲に在りき。一たび往き便ち當に已むべきに、何爲れぞ復た狐疑する。去り去らん當<sup>は</sup>た奚をか道はん、世俗久しく相欺く。悠悠の談を擺落し、請ふ余が之く所に從はんことを。

世俗にかかわつた過去を回想し、「稱心」を好しとする、其十、其十一の語り手に對して、本詩の語り手は、躊躇せず<sup>に</sup>に隱遁すればよいのだと言ひ、自らに從うように呼びかける。世俗を強く否定するのは、其八、其九と同じである。

本詩では、一度出仕しただけで歸隱し、二度と出仕しなかつた長公（前漢の長摯）と、歸隱して高尚な人柄を示したものの、その後數回出仕した仲理（後漢の楊倫）の二人の人物の歸隱を取り上げて、思索を展開している。長摯は一たび仕えたが、激しい反俗の節操ゆえに、活躍すべき機會を失ひ、歸隱して二度と出仕しなかつた人物であるとして、語り手は自らを重ねている。一方の楊倫も、自らの志が時代と乖離しているとして官を辭するや、弟子が千人あまり集まり、その高節が顯現した人物である。しかし彼は、その後も出仕し、儒者としての

道義を貫こうとしてその度に退けられ、終には退隱した。

語り手は、楊倫について、まっすぐ隱遁の道を進めばよかつたのであり、隱遁を躊躇（「狐疑」）する必要などなかつたのだと言ひ。そして、永遠に欺き續ける世俗のいい加減な話など拂いのけ、我に從つて一切世俗を顧みない孤高の隱遁の道を進みたまえと呼びかける。この言葉は直接にはもう一人の内なる語り手である其十、其十一の語り手に向けられている。其十、其十一の語り手は、出仕して苦々しい思いを重ね、苦惱の末に歸田した。そして貧窮を受け入れて貧士として道義を守り續けることに歡びを見いだす生き方を選び、その生き方をもつて世俗に對峙し自らを保ち續けることを決意したのであつて、もとより出仕することは考えていない。それが隱遁を躊躇しているとされるのは、歸田の過程、及び固窮の節を懐く者の世俗への對峙のあり方による。例えば「詠貧士七首」其七の黃子廉は、固窮の節を懐き、飢えに涙する妻子に心を痛めながらも、手厚い贈り物は感謝しつつ斷つていゝ。また「有會而作（會ること有りて作る）」詩において、固窮に志す語り手は、嗟來の食を施す者の心を善しとするとしている。黃子廉の例を踏まえると、施しは斷ると讀めるものの、こうした世俗を截然と拒絶していかないかのようなあり方が、隱遁を躊躇しているとされるのである。

## 三、敘情的主體としての三人の語り手

## 其十二

有客常同止、取捨邈異境。一士長獨醉、一夫終年醒。醒醉還相笑、發言各不領。規規一何愚、兀傲差若穎。寄言酣中客、日沒燭當秉。

客有り常に止を同じくするも、取捨邈として境を異にす。一士は長

く獨り酔ひ、一夫は終年醒む。醒醉還た相笑ひ、發言各領せず。規  
規たるは一に何ぞ愚かなる、兀傲たるは差ま穎まれるがごとし。言を寄  
す酣中の客、日没すれば燭當に乗るべしと。

本詩の語り手は、常に獨り酔う者と終年醒める者という二人の客が  
いると言ひ、終年醒めた者の、見識が狭く細かいことにこだわる「規  
規」たるところは、何とも愚かであるとする。一方、常に酔う者の、  
世俗と合わず傲りたかぶる「兀傲」たるところは、「規規」にやや勝  
るとしている。

この二人の客が何者であるかについて、「自己の中に分裂してある  
二面性を客観化してうたつたもの」、「醒者と酔者とはいずれも淵明の  
分身」<sup>①</sup>、「淵明の相反する性向を擬人化したもの」<sup>②</sup>、「淵明が設定した二  
つの相反するキャラクター」とする解釋がある。また其十三について  
は「形影神」における紋情的主體の設定との類似も指摘されている。  
さらに、下定雅弘氏は、『二十首』の全篇が、閑居の決意と、官界へ  
の未練との間で揺れる思いを表現しており、前者の立場から後者の立  
場に語りかける獨白體の様相をしばしば呈している。」としている。

これまで検討してきた其十二までの紋情的主體としての語り手  
は、①天道と人道の一致を見、現在の自分のあり方を受け入れている  
「我」(其<sup>\*</sup>二)、②世俗における自己疎外の認識をもって歸田し、固窮  
の節によつて自らを保とうとする「我」(其<sup>\*</sup>二、其<sup>\*</sup>四、其<sup>\*</sup>五、其<sup>\*</sup>十、其<sup>\*</sup>十  
二)、③世俗を截然と否定し、孤高の節操を保とうとする「我」(其<sup>\*</sup>三、  
其<sup>\*</sup>六、其<sup>\*</sup>七、其<sup>\*</sup>八、其<sup>\*</sup>九、其<sup>\*</sup>十二)の三人である。

大矢根文次郎氏は「飲酒二十首」には「飲酒と詠懷の二面がある」  
とし、「飲酒に直接關わりのある詩首」として、其<sup>\*</sup>一、其<sup>\*</sup>三、其<sup>\*</sup>七、  
其<sup>\*</sup>八、其<sup>\*</sup>九、其<sup>\*</sup>十三、其<sup>\*</sup>十四、其<sup>\*</sup>十八、其<sup>\*</sup>十九、其<sup>\*</sup>二十の十首を擧げ

ている。(先の「\*」は飲酒にかかわる表現を含む作品)この大矢根氏の  
分類に従つて、其十三における常に醒めている規規たる者、常に酔つ  
て驕る兀傲たる者を、それぞれの作品に措定してみると、規規たる者  
は②、兀傲たる者は③に同定することができる。其六、其十二には飲  
酒に關わる表現がないが、世俗に對する厳しい否定を演出しており、  
兀傲たる者と考えられる。また①の「我」は飲酒しているが、世俗を  
強く否定していないから、兀傲たる者ではなく、内なる他者として②  
と③を抱え込んでいる其十三の「我」と同一と考えられる。其一にお  
ける言表が、内なる他者②③の思索を喚起し、其十二の「請從余所  
之」という強い語氣の呼びかけに應えるかのように、其十三において  
再び登場したのである。

このように措定すると、其二から其十二までは、兀傲たる者と規規  
たる者とが關わり合いながら、それぞれに自らの歸隱についての思索  
を展開しているとして讀むことができる。斯波六郎氏は、「鋭い理智  
を働かせて、觀じ來り觀じ去りつつ、人生の法則をさぐりあて、それ  
に據つて生きぬかうとするのも、確かに一つの生き方である。」と述  
べ、この生き方を「哲學的な生き方」と假稱している。兀傲たる者は、  
自らは道義の失われた時代に生きており、自らの人生は有限であると  
し、截然と世俗を否定し、憂いを懷え込みながらも隠遁して高節を守  
り續ける生き方を選んだ者である。一方、規規たる者は世俗において  
苦々しさを味わうなかで自らのあるべき姿を模索し、世俗を截然と否  
定するのではなく、自らを本來窮した者として、飢寒に苦しみながら  
道義を守るといふ固窮の節によつて世俗に對して自らを保つていくこ  
とを決意した者である。

本詩の語り手は、兩者の「規規」たるところ、「兀傲」たるところ

について判断を下すのみで、それぞれの「哲學的な生き方」に判断を下してはいない。兩者の生き方を抱え込んで現實に對峙し、いかに閑居の日々を過ごすのか、自らの言葉紡ぎ出していかねばならないのである。しかし、とりあえずは「兀傲」たる者の言葉に従つて大いに飲酒を樂しもうとする。

#### 四、閑居の現實―孤獨と飢寒

##### 其十四

故人賞我趣、挈壺相與至。班荆坐松下、數斟已復醉。父老雜亂言、觴酌失行次。不覺知有我、安知物爲貴。悠悠迷所留、酒中有深味。

故人我が趣を賞し、壺を挈ひきげて相與に至る。荆を班はきて松下に坐し、數斟にして已に復た酔ふ。父老雜亂して言ひ、觴酌行次を失す。我有るを知るを覺えず、安くんぞ物を貴しと爲すを知らんや。悠悠たるは留まる所に迷ふ、酒中に深味有り。

其十三を受け、本詩では、語り手の飲酒への志向を理解する友人たちが酒を携えて訪れ、ともに飲酒した時のことを描く。孤高の表象である松の下、無上の樂しみと歡びに満ちた、彼我の區別のない酒宴が展開される。この宴は紛れもなく心になう「稱心」の宴であつた。

##### 其十五

貧居乏人工、灌木荒余宅。班班有翔鳥、寂寂無行跡。宇宙一何悠、人生少至百。歲月相催逼、鬢邊早已白。若不委窮達、素抱深可惜。

貧居人工乏しく、灌木余が宅を荒らす。班班として翔鳥有り、寂寂として行跡無し。宇宙一に何ぞ悠かなる、人生百に至ること少なり。歲月相催逼し、鬢邊早已に白し。若し窮達に委ねずんば、素抱深く惜しむべし。

「稱心」の酒宴が終わつて酔いが醒めるや、閑居の現實、寂寥感と孤獨感が立ち上がってくる。語り手は、手入れも行き届かず、雜木が生えて荒れ放題、ただ鳥が翔るばかりで、訪れる人も無い貧居において、孤獨のうちに過ぎてゆく人生を見つめる。

貧居の情景と孤獨、人生の短さの實感が、思索を喚起する。「委窮達」とは、窮達は自らと關係のないものとするを言う。「詠貧士七首」其四には、貧賤について「非道故無憂（道に非ず故に憂ひ無し）」とある。貧賤は時の否泰によるもので、仁義の道の實踐とは何ら關わりのないものであるから、貧賤であつても何の憂いもないとするのである。「若不委窮達、素抱深可惜」は、ひとたび窮達ということを中心に掛けるや、苦々しい思いを嫌という程味わつた世俗と關わることとなり、自らが大切にしているものを失つてしまうから、窮達は時の否泰によるものとして、もとから心に懷いていた「素抱」を守つていこうという句として讀むことができる。では、「素抱」とは何か、其十六においてその思索が展開される。

##### 其十六

少年罕人事、遊好在六經。行行向不惑、淹留自無成。竟抱固窮節、飢寒飽所更。弊廬交悲風、荒草沒前庭。披褐守長夜、晨鷄不肯鳴。孟公不在茲、終以翳吾情。

少年人事罕に、遊好は六經に在り。行き過ぎて不惑に向とするに、淹留自ら成る無し。竟に固窮の節を抱き、飢寒更る所に飽く。弊廬悲風交はり、荒草前庭を没す。褐を披て長夜を守るに、晨鷄肯へて鳴かず。孟公茲に在らず、終に以て吾が情を翳おほふ。

本詩の冒頭の六句は、「祭從弟敬遠文」の「余嘗學仕、纏綿人事、流浪無成、懼負素志。（余嘗て學仕するも、人事に纏綿たり、流浪して成る

無く、素志に負かんとことを懼る。」と重なる。この「素志」は、其十五の「素抱」のことである。ここでは、何も成し遂げられず、「素志」に負くことを懼れて固窮の節を懐き、飢寒はもう十分というほど味わったと言う。若くして六經に親しんだ語り手にとって「素抱」とは、道義を守ることであっただろう。不惑になろうとしてもなにも成し遂げられなかった自分にとつては、固窮の節を懐き、道義を守り続けるしかないことが確認されているのである。

語り手は改めて閑居の有様を見つめる。そこは秋風が悲しげに吹く、雑草に覆われた草廬であり、ぼろを着て、長夜を過ごす空間であった。閑居のリアルな孤絶感が、知己のいない寂しさを喚起する。「詠貧士七首」其六では、雑草が茂る貧居に住む張仲蔚には知己である劉龔（孟公）があつたと言ひ、貧士にとつての知己の可能性を確認し、孤獨の問題が解決されていた。しかし、ここには劉龔のごとき知己がおらず、語り手の心は暗く翳つていくのである。

元興二年（四〇三）に制作された「癸卯歲十二月中作與從弟敬遠一首」には、「寢迹衡門下、遯與世相絶（迹を衡門の下に寢め、遯として世と相絶つ）」、「勁氣侵襟袖、簞瓢謝屢設。蕭索空宇中、了無一可悅（勁氣襟袖を侵し、簞瓢屢設くるを謝す。蕭索たり空宇の中、了として一の悦ぶべき無し）」と、本詩を彷彿とさせる情景が描かれ、「謬得固窮節（謬りて固窮の節を得たり）」と言う。そして暗澹たる時代の中に固窮の節を懐いて自らを保ち続ける思いを、「寄意一言外、茲契誰能別（意を寄す一言の外、茲の契誰か能く別たん）」と、敬遠に傳えている。敬遠は陶淵明の心を理解する、張仲蔚における劉龔のごとき存在であつた。

陶淵明の閑居に關わるのは、序に登場する故人、其九の田父、其十四の故人（父老たち）である。其九の田父、其十四の故人は、いずれ

も陶淵明を高節を懐いた酒好きの隱遁者として理解し、好意を寄せる者たちであつたが、固窮の節を懐いて自らを保つ者の心に觸れることはなかつた。序の故人も陶淵明の獨酌に加われる存在ではない。彼らは敬遠のような知己ではなかつたのである。

## 五、閑居の現實―知己・友人

### 其十七

幽蘭生前庭、含薰待清風。清風脫然至、見別蕭艾中。行行失故路、任道或能通。覺悟當念還、鳥盡廢良弓。

幽蘭前庭に生じ、薰りを含みて清風を待つ。清風脫然として至らば、蕭艾の中より別たれん。行き行きて故路を失ふも、道に任さば或は能く通ぜん。覺悟して當に還るを念ふべし、鳥盡きて良弓廢せらる。其十七では、靖節と世俗に關わる思索が展開されている。しかしこれは已に確認されたことであり、また其十六では知己のいない寂しさが吐露されていたことからしても、本詩は、閑居の空間にいない知己への思いを表出した作品として理解したほうがよいであろう。

幽蘭はやがて雑草のなかで區別されるものであるから、もとの道を失つて世俗に纏綿としても、心にかなうということを大切にし、本来の道にもどることを強く願つてほしい、世俗は必要が無くなれば捨ててしまふだけの世界だからと、張仲蔚における劉龔のごとき知己に寄せる思いを述べた作品として讀むことができる。この知己は政治世界に身を置く人物である。

### 其十八

子雲性嗜酒、家貧無由得。時頼好事人、載醪祛所惑。觴來爲之盡、是語無不塞。有時不肯言、豈不在伐國。仁者用其心、何嘗失顯默。



子雲性酒を嗜むも、家貧にして得るに由無し。時に頼たのひに好事の人、醪さかを載せて惑ふ所を祛きらんとす。觴來れば之が爲に盡くし、是れ諮りて塞たされざる無し。時に肯へて言はざる有るは、豈に國を伐つに在らざらんや。仁者其の心を用ふるに、何ぞ嘗て顯黙に失せん。

其十八では、貧窮のうちにあつたが、惑いを解くために訪れる好事の者には、盃を重ねつつ語り、惑いを解かないことはなかつたという揚雄を登場させている。諸注の指摘のごとく、この揚雄の姿には語り手自身が重ねられている。親しい友人たちに向けて、揚雄のように私は何でも答え、決して語ることに沈黙することを誤らないのだから、ぜひ酒を携えて訪れてほしいと傳えているのである。

其十五、其十六においては、序に言う「閑居して歡び寡なき」現實の閑居の狀況が確認され、飢寒と孤獨の中で固窮の節を懐く自らが見いだされ、其十七と其十八において知己、故人を思うのである。

## 六、止まり續ける我

### 其十九

疇昔苦長飢、投去去學仕。將養不得節、凍餒固纏己。是時向立年、志意多所恥。遂盡介然分、終死歸田里。冉冉星氣流、亭亭復一紀。世路廓悠悠、楊朱所以止。雖無揮金事、濁酒聊可恃。

疇昔長飢に苦しみ、去を投じ去りて仕を學ぶ。將養節を得ず、凍餒固より己に纏ふ。是の時立年に向とし、志意恥づる所多し。遂に介然の分を盡くし、終死田里に歸る。冉冉として星氣流れ、亭亭として復た一紀なり。世路廓として悠悠たるは、楊朱の止まる所以なり。金を揮ふの事無しと雖も、濁酒聊か恃むべし。

其十六では自らが固窮の節を懐くようになったことが回顧されているが、本詩では、初めて出仕した頃から現在までが改めて振り返られている。

語り手が飢えに苦しみ「學仕」したのは、三十歳になろうとしていた頃であつた。『論語』爲政「三十而立。(三十にして立つ)。」の皇侃の義疏に「立、謂所學經業成立也。古人三年一經、從十五至三十是又十五年、故通五經之業。所以成立也。(立は、學ぶ所の經業成立するを謂ふなり。古人は三年にして一經、十五よりして三十に至るまで是れ又十五年なり、故に五經の業に通ず。成立する所以なり)。」とある。學を修めた者としての見識と志を持つ自分が、子として最も大切なことである親の扶養もできず、飢寒からも逃れられなかつたことを回想しているのである。

第七、八句は、世俗と妥協できない者としての確乎たる本分を盡くし、二度と世俗には拘わるまいと歸田したことを言う。この語り手の姿は、其四の失群の鳥という自畫像とは異なる。飢寒を受け入れて道義を守り續けることを歡びとし、そのことによつて世俗に對峙し續けることを自覺した者の言葉なのである。

第九、一〇句は、歸田以後、時が流れ、十年(もしくは十二年)が過ぎたことを言う。「冉冉」は、時間がじわじわと確實に流れる様子、「亭亭」は、遠い様子、あるいは「將に至らんとするの意なり」と解釋される。しかし「亭亭」は、時間的ではなく空間的に遠いという意味で用いられる語であり、またその場合もただ遠いだけではなく、對象が高い位置、仰ぐような位置にあつたり、明るかつたりして、意識に鮮明に捉えられる意味も含む。また、「亭亭」には、人の高潔さという場合がある。『後漢書』蔡邕傳に「情志泊兮亭亭、嗜欲息兮



無由生。(情志泊として心亭たり、嗜欲息みて由りて生ずる無し。)」とあるのがそうである。李賢注に「亭亭、孤峻之貌。(亭亭は、孤峻の貌なり。)」とある。其八では「凝霜殄異類、卓然見高枝(凝霜異類を殄くし、卓然として高枝を見る)」と、卓然と姿を現した松に節操を守る自分自身を見ていた。本詩の「亭亭」も、第七句の「介然」を受け、再再たる時の流れの中でくつきりと介然とした姿を示し續けて一紀が経つたと解釋したい。ここには一紀という年月、固窮の節を守り續けてきた自己を見つめる語り手の姿がある。

第一一、一二句は、一紀の年月が経過したことを受け、自らが世俗に見切りをつけて田園に止まり續けたのは、道義が失われ、果てを見極めることもできない空漠たる世界が廣がつているからであることが語られる。そして、濁酒を少しばかり心待ちにしていることを述べた結ばれている。その飲酒は、固窮の節を懐いて歸隱し、閑居し續けた自らの姿を確認し、それを肯定しつつ行われるものである。<sup>(23)</sup>

### 其二十

義農去我久、舉世少復眞。汲汲魯中叟、彌縫使其淳。鳳鳥雖不至、禮樂暫得新。洙泗輟微響、漂流逮狂秦。詩書復何罪、一朝成灰塵。區區諸老翁、爲事誠殷勤。如何絕世下、六籍無一親。終日馳車走、不見所問津。若復不快飲、空負頭上巾。但恨多謬誤、君當恕醉人。

義農我を去ること久しく、世を擧げて眞に復すること少なり。汲汲たる魯中の叟、彌縫して其れをして淳ならしむ。鳳鳥至らずと雖も、禮樂暫く新たなを得たり。洙泗微響輟み、漂流して狂秦に逮ぶ。詩書復た何の罪かある、一朝灰塵と成る。區區たる諸老翁、事を爲すこと誠に殷勤たり。如何せん絶世の下、六籍一の親しむ無きを。終日車を馳せて走るも、津を問ふ所を見ず。若し復た快く飲まずん

ば、空しく頭上の中に負かん。但だ恨むらくは謬誤多きこと、君當に醉人を恕すべし。

其二十では、其十九において自らが止まる理由として擧げた「世路廓悠悠(世路廓として悠悠たり)」を受け、改めて自らが生きる時代についての思索が展開される。

語り手は上古の純朴さが失われ、六經に親しむ者もない現在に至る過程を振り返り、現在が道義の失われた時代であることを確認する。そしてこのいかんともしがたい時代に生きなければならぬのであるから、思う存分酒を飲まないわけにはいかなんと言ひ、最後に、これまでの言葉は戯れ言であるから寛恕してほしいと請ひ、思索を終えてゐる。本詩の飲酒は、道義の失われた時代に生きる者の憂いを忘れ、憂きをはらすための行爲である。

其一では、「忽與一觴酒、日夕歡相持(忽ち一觴の酒と、日夕歡びて相持す)」と、飲酒に言及していたが、其十九、其二十において、その意味が自らのうちに明確にされたと讀むことができるであらう。

### おわりに

本小論では、「飲酒二十首」を、二十首それぞれが前後の作品と緊密に關係した連作詩であるとし、表現の對自性に着目しながら、陶淵明の閑居における思索と絳情の流れを考察してきた。

作品間の關係に着目すると、「飲酒二十首」は、世俗における他者として歸田し「稱心」の生き方を模索する「規規たる我」、世俗を否定し、孤高の節操を保とうとする「兀傲たる我」、そしてこの二人を自分の中に他者としてかかえている「我」という、三人の絳情的主體によつてなされた、ダイナミックな思索であつたと讀み解くことがで

きる。其一で、天道と人道の一致を受け入れて閑居していることを「我」が語ると、其二では、「規規たる我」が天道と人道の乖離する人の世にあつて道義を守るには、固窮の節による他はないと言う。すると其三において、「兀傲たる我」が、道義を守る者を不遇ならしめている世俗のあり方を厳しく否定する。以下、其十二まで「兀傲たる我」と「規規たる我」とが、それぞれに自らの歸隱についての思索を展開してゆく。「規規たる我」は、自分が政治世界においては他者であるとして歸田したことを言い、自らを本来窮した者とし、飢寒に苦しみながら道義を守り続けるあり方を見いだしてゆく。一方、「兀傲たる我」は、自らが道義の失われた時代に生きねばならず、人生は有限であるという憂いを懐きながら、世俗を強く否定し、隱遁して高節を守り続ける生き方を截然と選び、「規規たる我」が隱遁を躊躇しているとするのである。其十三の「我」は、自らの中に「規規たる我」と「兀傲たる我」をかかえこみ、其十四以降で、閑居の現實に向き合うことになる。「我」は、知己のいない孤獨の中にあつて、固窮の節を懐き、道義を守り続ける自身のあり方を確認し、一紀（十年もしくは十二年）の間、世俗を見据えて田園に止まり続けたことを思うのである。

このような田園に止まり続ける自らのあり方を改めて捉えなおす思索が行われた背景には、人間の悪が醜く露呈した暗澹たる政治状況を措定せざるをえない。本論では閑居の場に従弟敬遠のような知己がないことを重視し、「亭亭復一紀」を歸田後一期が経過したと解し、それは、劉裕による王朝の篡奪が成し遂げられようとする頃のものであつたと想定した。

陶淵明は、閑居の日々において、時には大いに飲酒して憂いを忘れ、

固窮の節を懐いて道義を守り続けることよつてのみ、世俗に對峙し、自己を保ち続けることができた。道義の失われた時代に生きる者の憂いを晴らす酒は、兀傲たる者としての飲酒と重なるであろう。また、一紀の閑止まり続けたことを確認しつつ飲む酒は、ささやかではあるが、矜恃に満ちたものであつたことだろう。

## 注

- (1) 拙稿「陶淵明『詠貧士七首』小論」(『中國文化』七〇、二〇一二) 四二―五五頁。
- (2) 例え、李華(『陶淵明新論』、北京師範學院出版社、一九九二、一一九頁)の、主章・第二十九首・末章、魏耕原(『陶淵明論』北京大學出版社、二〇一一、一二四頁)の前段八首・中段八首・後段四首、他。
- (3) 下定雅弘「陶淵明『飲酒二十首』をどう讀むか?」その主題と制作時期」(『中國文史論叢』四、二〇〇八) 三一―九三頁。
- (4) 稀代麻也子「『飲酒二十首并序』の陶淵明」(『中國文化』六六、二〇〇八) 四一―五四頁。
- (5) 大上正美「言志の文學」(安藤信廣・大上正美・堀池信夫編『陶淵明詩と酒と田園』、東方書店、二〇〇六) 一三三頁。
- (6) 袁行霽著『陶淵明集箋注』(中華書局、二〇〇三) 二四〇頁。
- (7) 大上正美氏、前掲書、一三七、一三八頁。
- (8) 例え、下定雅弘氏、前掲論文に指摘がある。
- (9) 吉川幸次郎著『吉川幸次郎全集第七卷』(筑摩書房、一九七四) 三五六頁。
- (10) 斯波六郎著『陶淵明詩譯注』(北九州中國書店、一九八一再版) 二七三頁。

- (11) 都留春雄・釜谷武志著『陶淵明』（鑑賞中國の古典⑬、角川書店、一九八八）一八五頁。
- (12) 三枝秀子著『たのしみを詠う陶淵明』（汲古書院、二〇〇五、九五～一一七頁）に「稱心」についての詳論がある。
- (13) 例えば周振甫著『周振甫講古代詩詞』（江蘇教育出版社、二〇〇五、二七二頁）に「一種人一生困苦而得名、但他們安于貧困、稱心意就好。」とある。
- (14) 一海知義著『陶淵明』（岩波書店、一九五八）、六〇頁、後『一海知義著作集 1 陶淵明を読む』（藤原書店、二〇〇九）三二九頁。
- (15) 都留春雄・釜谷武氏前掲書、一九八頁。
- (16) 和田武司著『陶淵明傳論 田園詩人の憂鬱』（朝日新聞社、二〇〇〇）一六二頁。
- (17) 下定雅弘氏、前掲論文、四九頁。
- (18) 「形影神」の敘情的主體については、興膳宏「陶淵明」（『人物中國の歴史6 長安の春秋』集英社、一九八一、六二～八〇頁）、門脇廣文「陶淵明研究ノート―陶淵明の詩文に見える〈影〉について」（『大東文化大學紀要・人文科學』通號二二、一九八四、三五～五三頁）、安藤信廣「陶淵明の虚構と敘景」（安藤信廣・大上正美・堀池信夫編『陶淵明 詩と酒と田園』、東方書店、二〇〇六、一七四～一八一頁）他の詳論がある。
- (19) 下定雅弘氏、前掲論文、六一頁。
- (20) 大矢根文次郎著『陶淵明研究』（早稲田大學出版部、一九六九）六二〇頁。
- (21) 斯波六郎氏、前掲書、四九頁。
- (22) 櫻田芳樹「隱逸の傳統―酒と田園」（安藤信廣・大上正美・堀池信夫編、前掲書、四四頁）に「その酒も隱逸を選ぶ自らの境地の正しさを語る一面をもつて、繰り返し表現されるに足るものであった。」とある。

◎本論は讀陶詩會（大上正美氏主催、二〇一九・五・一八）における報告（「連作として讀む『飲酒二十首』覺え書き」）を基に、改めて考察を加えたものである。